

神は敵とられた

〔聖書〕哀歌2章5-14節

5 主はまことに敵とられた。イスラエルを圧倒し／その城郭をすべて圧倒し、皆をすべて滅ぼし／おとめユダの呻きと嘆きをいよいよ深くされた。6 シオンの祭りを滅ぼし／仮庵をも、園をも荒廃させられた。安息日をも、祭りをシオンに忘れさせ／王をも、祭司をも／激しい怒りをもって退けられた。7 主は御自分の祭壇をすら見捨て／御自分の聖所をすら見捨て／城郭をも城壁をも、敵の手に渡された。敵は主の家で喚声をあげる／あたかも祭りの日のように。8 主はおとめシオンの城壁を滅ぼそうと定め／打ち倒すべき所を測り縄ではかり／御手をひるがえされない。城壁も皆も共に嘆き、共に喪に服す。9 城門はことごとく地に倒れ、かんぬきは砕けた。王と君侯は異国の民の中にあり／律法を教える者は失われ／預言者は主からの幻による託宣を／もはや見いだすことができない。10 おとめシオンの長者は皆、地に座して黙し／頭に灰をかぶり、粗布を身にまとう。エルサレムのおとめらは、頭を地につけている。11 わたしの目は涙にかすみ、胸は裂ける。わたしの民の娘が打ち砕かれたので／わたしのはらわたは溶けて地に流れる。幼子も乳飲み子も町の広場で衰えてゆく。12 幼子は母に言う／パンはどこ、ぶどう酒はどこ、と。都の広場で傷つき、衰えて／母のふところに抱かれ、息絶えてゆく。13 おとめエルサレムよ／あなたを何にたとえ、何の証しとしよう。おとめシオンよ／あなたを何になぞらえて慰めよう。海のように深い痛手を負ったあなたを／誰が癒せよう。14 預言者はあなたに託宣を与えたが／むなしい、偽りの言葉ばかりであった。あなたを立ち直らせるには／一度、罪をあばくべきなのに／むなしく、迷わすことを／あなたに向かって告げるばかりであった。

〔序〕戦争に負けた8月15日

今日は8月15日敗戦記念日です。1945年の今日、天皇が無条件降伏を求める連合国のポツダム宣言を受諾すると詔勅を自分の声で国民に向けて放送し、戦争が終わりました。戦争に負けて敵国に降伏するなどということは、日本の歴史が始まって以来初めてのことでした。当時私は13才の少年に過ぎませんでしたが、それでも大変なショックを受け、人生が一変してしまったのです。

しかしあれから64年経ちました。生まれる前の出来事だと言う人がどんどん増えて3/4以上になりました。日本が世界を相手に戦争をして負けてしまったということが、それほど大きな出来事とは感じられなくなってきているのではないのでしょうか。

今日の聖書哀歌は、BC587年に南王国ユダがバビロン帝国の大軍によって都のエルサレムを破壊・占領され、滅亡する悲劇の時に生まれた歌です。最後の王ゼデキヤは捕えられ、目の前で息子たちが殺されるのを見た後で両眼をつぶされ、バビロンに連れて行かれ、盲目の生涯を獄中で過しました。

要害堅固だった城が、城門も城郭も破壊され、老人も子供も地に倒れ伏し、おとめも若者も剣にかかって死にました。飢えがひどくなり母親が我が子を食べ物にすることも起りました。主だった人々は皆捕囚となり、貧しい者だけが取り残されたのです。これが2600年前の国が戦争に負けるという実態だったのです。

さて私たちの国日本が64年前に経験した敗戦は、どうだったのでしょうか。1945年の日本国内では、3月10日一晩の大空襲で、東京の下町は焼け野原になり、10万人の市民が死にました。6月23日軍司令

官の自決で終わった沖縄本島地上戦では、市民を含む25万人が殺されました。8月6日の原爆で40万人の広島市が一瞬にして廃墟になりました。二発目は長崎に落とされ、やっと8月15日。1931年の満州侵略に始まる15年戦争を終えさせられたのでした。でもそれから後に、外地に取り残された人々が日本に帰ってくるまでに味わった悲惨と苦しみが続きます。

日本人の死者だけでも310万人、私たちの民族が味わった恐ろしい経験を簡単に忘れてはなりません。8月15日を決して風化させてはなりません。そこで私が示されたみ言葉が「主はまことに敵となられた」(2:5)という、すさまじいみ言葉です。

[1] 15年戦争の傷あと

昨年私たちが忘れてはならぬ重大な事件が起りました。航空自衛隊のトップ田母神幕僚長が「我が国が侵略国家だったというのは、まさに濡れ衣である」という論文を発表して、さすがの自民党政権もかばい切れず、解任した事件です。「自分たちの国に誇りを持たずに国防に命をかけられないではないか」と言うのです。しかし過去の誤りを認識せずに良い国だといくら吹き込んでも、正しい国防意識は高まらないのではないのでしょうか。

日本は1895年に日清戦争に勝利して台湾を領有しました。1910年には大韓帝国を併合して朝鮮半島を領有しました。1931年満州事変を起こして、満州国かいらい政権を打ちたてて支配権を確立。続いて支那事変をきっかけに中国本土に攻め込で、広大な中国大陸を支配しようと試みました。戦線が拡大するほどに補給が困難になり泥沼状態にはまりました。米英等の経済封鎖という制裁によって重要な物資に欠乏し、東南アジアの資源を手に入れようと、米英蘭に対しても太平洋戦争を開始したのでした。

日本はシンガポールを占領して南方方面総司令部を置き、東南アジア全体を支配することにしました。ですから1941年12月8日の真珠湾奇襲攻撃よりも1時間以上早くマレー半島北部に上陸し、ジャングルの中を軽戦車隊と自転車部隊で一気に南下し、2月15日にシンガポールを占領しました。私たちはまるで戦争が大勝利で終わったかのように、提灯行列をして湧き返りました。

日本軍はシンガポール占領3日後に、18才以上の中国人成人男子を皆呼び出し、密告者が指示した危険分子を片端からトラックで東部海岸に運んで、銃殺しました。その数約4万人。中国人社会は戦場で連れ出されて手伝いをさせられていると思っていました。

シンガポールには中国の革命運動をやり遂げた孫文の支援基地があり、華僑たちは物心両面の支援を新しい中国に、そして日中戦争になると国民党政府軍に送り続けました。ですから攻めて来た日本軍に一番激しく抵抗したのも中国人義勇兵だったのです。日本軍にとっては治安確保のために、危険分子の粛清が緊急でした。

戦後東部地区の開発工事におびただしい白骨と入れ歯、時計、カフスボタン等の遺品が発掘され、大虐殺が明るみに出されました。賠償請求は、講和条約で英国が請求権を放棄したのだからと日本政府は応じません。大きな排日運動が起り、日本は経済援助無償 5000 万ドル・有償 5000 万ドルと、殉難者記

念塔建設費負担で騒ぎを収めました。

その記念塔の前で毎年2月15日に殉難者慰霊祭行なわれます。私が赴任した翌年 1996 年に初めて日本人の参列が許されました。広島市の教職員組合代表でした。原爆の被害者の代表だからということでした。私たち夫婦はその日の朝そっと記念塔に出かけましたら、大きな花立てが7ヶ飾られていました。右端の一つだけ倒れています。風の仕業かなと近寄りましたら、何と広島代表の花立てだったのです。そして記念塔の下に捧げられている花束には、「悲しみは今なお深く」と記されたカードが付いていました。戦後 51 年経つ 2 月 15 日でした。

シンガポールでは小学 4 年生が社会科で“The Dark Years”(暗黒時代)という教科書で、また中学1年生が歴史で日本軍の占領時代を習います。そればかりではありません。1999 年 2 月 26 日に日本人中学すぐ近くの地元の中学校で生徒 14 人が救急車で病院に運ばれる騒ぎが起りました。学校が 16~18 才の軍事教練団の生徒6人を雇って、日本軍占領時代を追体験する演習を行った時に、つい興奮して過激になり怪我人を出してしまったのでした。「他の中学ではこんな事故が起らなかったのに」という校長のぼやきを新聞で読み、この様な演習が多くの中学でも行なわれていることが分かり、それが私にとって大きなショックでした。

私の家に日本から大学生が遊びにきましたので、高校に一日体験入学させましたら、帰ってきて泣いて報告しました。戦争中の日本兵の数々の所業を休み時間にいろいろ聞かされて、この美しい町で日本人がそんなに酷いことをしたという驚きと、そのことを日本では何も教えられず、のん気に遊びに来たというショックで泣いてしまったのだそうです。

シンガポールでもこうなのですから、日本人から受けた戦争の被害の傷あとはアジアの諸国の人々、特に中国の人々にとってどれ程深いものでしょうか。私たちが日本から出て行って与えた戦争の被害を、私たち日本人が軽々しく忘れることは許されないのではないのでしょうか。

[2] 赦罪・和解の難しさ

私たち夫婦がシンガポールに赴任したのは1995年5月でした。その8月15日朝刊の第一面に大きな活字で記されていました。「我々アジアが日本から聞きたい言葉は唯一語 apologize(謝罪する)なのに、どうしてそれが言えないのか」。その後の言葉です。「天皇裕仁が謝らなかったのだもの、今の指導者から謝罪が出てこないのは当然だろう」。そうです。天皇は白馬にまたがり陸海空の三軍を統帥する大元帥陛下でした。私たちは天皇は日本の道徳の根源と教えられました。自分が開戦布告した戦争で、310万人の臣下を死なせたのです。ところが天皇は退位すらしなかった。そしてそれを私たち日本人はあいまいに認めてしまいました。しかしアジアは50年経っても、はっきり見ていたのですね。私は大変な所に身を置いていることを知らされ、身震いました。

自分の心身の鍛錬のために、日本人小学校の道場で剣道の稽古を続けていましたら、私の周りに剣道を習いたいという学生が集まってきて、大学や高専に剣道部が生まれ、250人位になったのでしょうか。赤道直下の暑い国で重い防具を身につけて汗まみれの剣道に何故ひかれるのでしょうか。柔道をしている人には悪いのですが、剣道を通して日本人の心に触れたいというのです。相手を見事に切り伏せていく剣

法のかっこよさを映画で観たからという面もあるでしょうが、武士たちに見られる礼節を重んじ、切腹をいとわぬ忠節を尊ぶ武士道精神に、自分たちが持合わせていない心の特色をみて、剣道をやってみたいと思うようです。

私が赴任して2年後の8月9日の独立記念日の午前に、室内競技場でクリスチャンの1万人祈祷会が行われました。先ずイギリスの教会の代表者が植民地支配の傲慢さを床に平伏して謝罪しました。次に老婦人チョイさんが、日本軍憲兵隊で受けた拷問を静かに語りました。彼女の夫は死んでしまったのです。「電気は文化生活に欠かせません。でも私はそのスイッチにさわるだけで、異常に反応します。繰り返し受けた電気ショックの拷問が体に刻み込まれてしまったからです。私は赦しています。でも体は忘れないのです」。日本のクリスチャンを代表して、有賀喜一牧師がひざまずき、涙ながらに謝罪しました。

司会者が日本人が居たら立つようにと言いました。起立しますと周囲の若い人たちが集まってきて、私たち夫婦に手を差し伸べて口々に祈ってくれました。涙がとめどなく流れて、つらくてつらくて逃げ出したい思いに駆られました。シンガポールの友人から電話がかかってきました。「逃げ出したいほどつらかった」と申しますと「もうこの一回の祈祷会で十分だ。私たちは和解できた。心が軽くなった」と言ってくれました。クリスチャンたちでも戦後52年経って、やっとこの様な祈祷会を持てたのでした。赦すこと・和解することの何と難しいことでしょうか。

私たち夫婦をシンガポールに招いたのは、シンガポールバプテスト連盟の総主事 ジョン・チャン先生です。私が国外伝道委員長時代に、シンガポールから在留日本人の伝道のための宣教師を送って欲しいと要請がありました。日本人が救われなければアジアに平和は来ない。聖書を勧めるけれども日本人はボスだからシンガポール人の言葉に耳を傾けてくれない。彼らより年上の牧師夫妻が来てくれたら、少しは聞いてくれるだろうというのです。

日本の連盟の方針はその国の人々への伝道に協力するというものでしたから、これは別枠の要請です。そこで私は先ず松村先生夫妻に要請しました。当時先生は世界バプテスト連盟の副会長、夫人はアジア婦人連盟会長でした。このような方がシンガポールに駐在して下さったら、とても良い働きをなさるでしょう。夫人は OK でしたが、松村先生に別の召命感があってダメでした。それから先輩幾人かに声をかけたのですが応じてくださいません。

1989年8月バプテスト宣教100年の記念礼拝が西南のランキンチャペルでありました。その最中に「お前が行きなさい」という声が響いてきたのです。「えっ、私で良いのですか」。「その通り。お前が行きなさい」。私は喜んで決心しました。札幌に帰ると直ぐに教会に申出ました。しかし教会はまともに対応してくれません。辞表を毎年出して3年経ってやっと牧師招聘委員会を作ってくれました。ところが家内が賛成してくれません。アジア各地を回った時、ジャカルタ、マニラの雑踏で裸足のストリートチルドレンを見かけ、心を動かされていたのです。「あのような子供たちの所へなら行くが、シンガポールのような豊かな都市へなら、わざわざ行きたくない」と申します。若ければよいが、60才を過ぎては永続きしないでしょう。困りました。

するとチャン総主事がわざわざ雪の札幌を訪ねて来られて、お母さんの証をして下さいました。彼は貧しい中国人の家に生まれました。病弱で育たないだろうといわれました。親は金持ちにもらってもらえば、或

いは育つのではと思いました。一方マダム・チャンは中国本土の教育大学を出て、シンガポールの女子教育のために招かれ、南洋女子校を創設しました。自分でも子育ての経験をしたいと養子を探していました。そして骨と皮のジョンを引き受けて育てたのでした。

日本軍が攻めてきて学校は接収されてしまいました。ジョンの生みの父親は殺されてしまいました。平和が戻り、マダム・チャンは長らく校長を勤めて引退しました。熱心なクリスチャンです。しかし日本人だけは赦せないと厳しい心を捨てませんでした。牧師になっていたジョンがとうとうお母さんに言ったそうです。「お母さんは、どうして日本人を赦せないのですか。間違っています」。顔色を変えたお母さんは、部屋に閉じこもってしまいました。二週間後に出てくると言いました。「ジョン、貴方の言うとおり、私が間違っていました。日本人を赦します。どうか日本へ行って宣教師を送るよう頼んでおくれ」

家内はその証を聞いて、お母さんの祈りに応えなければとシンガポール行を決心してくれました。私たちが赴任した時には、マダム・チャンは既に亡くなっていました。しかしチャン先生夫妻は今も変わらずに、シンガポール国際日本語教会を支えて下さっています。赦すということは、本当に難しいことなのです。更に自分の罪を自覚して忘れないということも、難しいことなのです。

【結】 敵となって打ち据えられた神

神さまはどうして愛するイスラエルの敵となられたのでしょうか。要害堅固だった都の城門も城郭も破壊され、老人も子供も地に倒れ伏し、おとめも若者も剣にかかって死ぬ。飢えがひどくなり母親が我が子を食べ物にすることまで起るといふ悲惨な目に、どうして遭わせられたのでしょうか。おもだった人々を皆捕囚とし、貧しい者だけが取り残されるようにされたのでしょうか。

哀歌2章14節「預言者はあなたに託宣を与えたが、むなしい、偽りの言葉ばかりであった。あなたを立ち直らせるには、一度、罪をあばくべきなのに、むなしく、まよわすことを あなたに向って告げるばかりであった」

預言者は次々と出ました。しかし彼らは耳障りのよいことしか言わなかったのです。人々は耳に痛い言葉は聞きたくないのです。自分の罪があばかれる言葉は、聞きたくないのです。だから偽預言者は出てくるけれども、それでは人は神さまのもとに立ち返ることが出来ないのです。わたしたちが立ち直るためには、一度罪がはっきりとあばかれなければならないのです。罪があばかれる時に、本当の悔い改めが生まれるのです。

今朝の早天祈祷会で野口先生が後悔や反省程度ではダメだとおっしゃいました。ああ、まずいことをやらかしてしまったと反省したり、失敗してしまったと後悔する程度と、悔い改めとは違うのです。日本人は戦争に負けて、馬鹿なことをした、間違っていたと後悔し、反省しました。大空襲、沖縄の悲劇、広島・長崎の地獄絵、これは大変だった、矢張り戦争はしない方がいいと反省して平和憲法を持ったのです。

「国際紛争を解決する手段としての戦争、武力の行使は、永久に放棄する。陸海空軍等の戦力は持たない。国の交戦権は認めない」(憲法第9条)。しかし軍備を待たずに国家の安全を護れるのか。軍隊をもたずには国際平和に十分貢献できない、日本も普通の国になるべきだとの声が起こり、憲法改正の動き

が強くなってきました。それでよいのでしょうか。

我が国日本は、台湾・朝鮮半島の領有に始まって、中国大陸にまで支配権を拡大し、遂には東南アジア、太平洋全域に戦火を及ぼしました。その結果が日本人310万人が死に国内の都市至る所の破壊となりました。アジア諸国の死者・被害はいかばかりだったことでしょう。その悲惨さがあばきだす私たち日本の罪を、私たちは逃げずに、直視しなければなりません。そして深い悔い改めの証として、憲法第9条を堅持すべきではないのでしょうか。

神さまは徹底的に悔い改めを迫って、イスラエルの民の敵となり、一旦国を滅ぼされました。同様に日本にも、歴史始まって以来初めての敗戦を味あわせられたのです。愛の神さまが私たち日本の敵となられて、あのような悲劇をお与えになったのです。それなのにどうして敗戦を忘れようとするのですか。憲法を改正しようとするのですか。

それは福音を聞かないからです。神さまのみ言葉を聞かない限り、本当の悔い改めに導かれないからです。後悔や反省程度で終わってしまうからです。今何よりも必要なことは、すべての日本人が神さまの言葉を聞くことです。ですから死から復活されたイエスさまは、「すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい」とおっしゃったのです。

あの田母神さんが8月6日に広島で講演会をしようとしたそうですね。そのような事を企てる人が、広島にも居るのです。矢張り神さまのみ言葉を聞く日本人にならなければなりません。「わたしたちが立ち直るためには、一度罪がはっきりとあばかれなければならない。そのために神さまは私たちの敵とされた」という言葉を、8月15日にあたりしっかり聞いて、神さまに立ち返ると共に、すべての人に証して参らなければなりません。

お祈りします。「神さま、ひとり子イエスさまを十字架にかけ、あの死の苦しみの極みを味あわせてまでして、私たちの罪を贖ってくださったあなたの愛を、心から感謝いたします。その貴方が、敵となって私たちを打ち据え、悲惨な敗戦をお与えになりました。私たちは身を震わせて貴方の裁きを受けなければなりません。日本人は忘れようとしませんが、アジアの人々は容易に忘れないのです。私たちが深く悔い改めて、赦しと和解と平和の道を見出し、命のみ言葉を証するものとならせてください。お願いします。イエスさまの聖名によって、お祈りします。アーメン」